

金葉集



和書門			
二〇五八七	函	架	冊
一	一	一	一

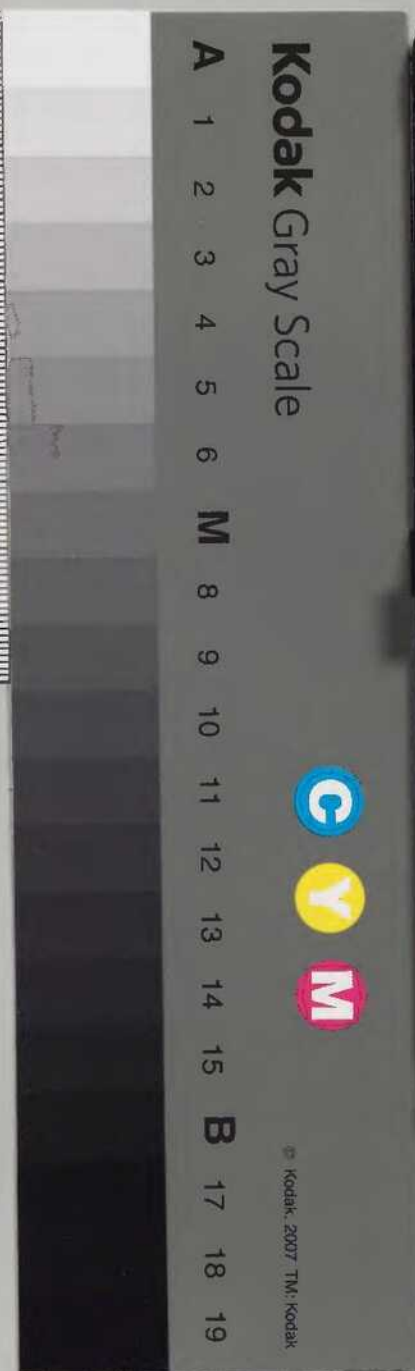
62

内閣文庫			
二〇五八七	函	架	冊
一	一	一	一

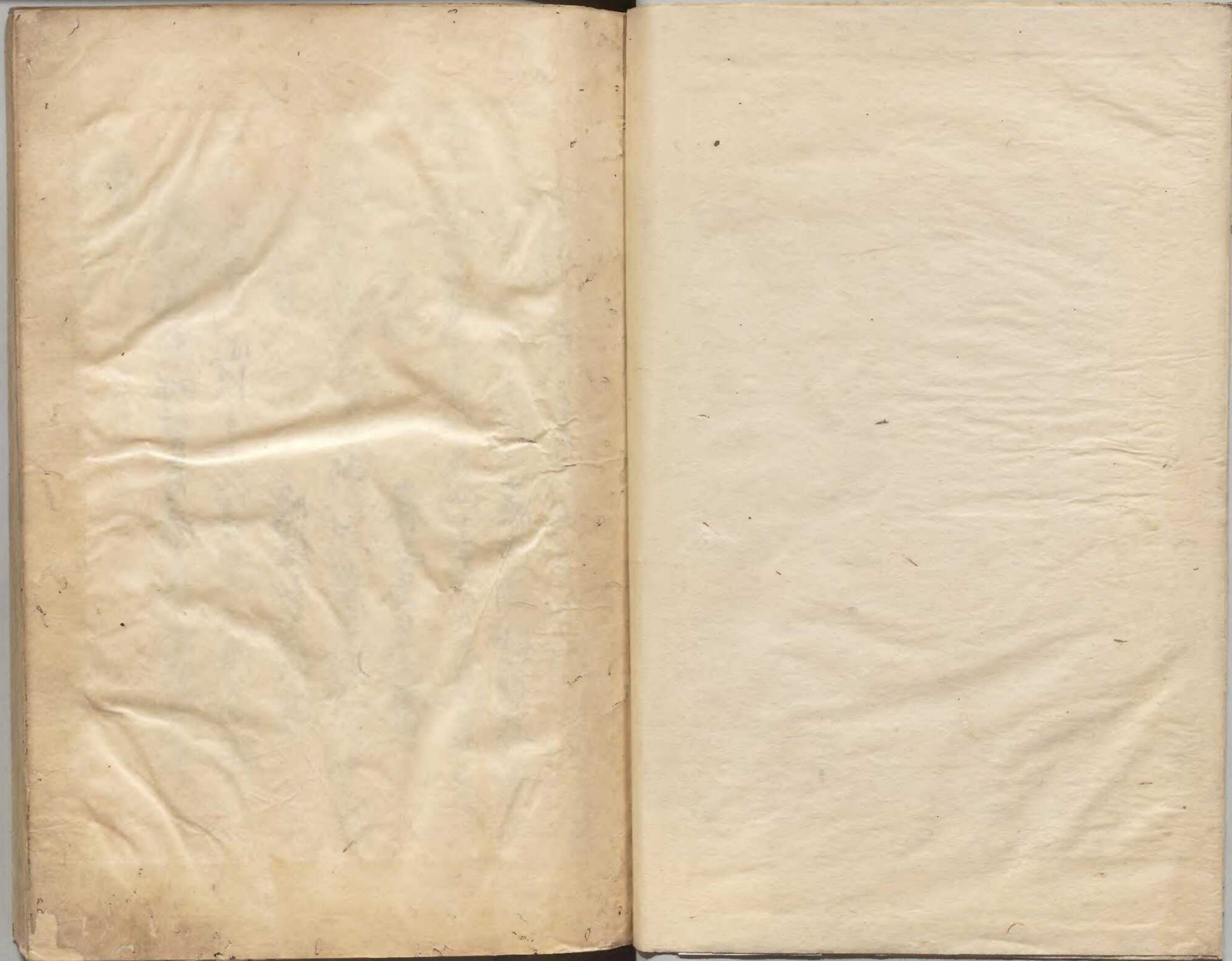


内閣文庫			
番 號	和	20587	
冊 數	1	(	1)
函 號	200	62	

200-62



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



あまのきりぎりすはよりきけし初雪とよふらん
春まゝの實

おぼあけてきりぎりすをきくもよふらん
實行の家乃所合も處のきけりらん

少将公教母

おぼあけてきりぎりすをきくもよふらん

藤原政輔卿

多とてかきぬおとよき家た田の山をきり

霞のふをより 太宰大貳公實

あはゆききりぎりすはよりきけし初雪とよふらん

百首その中よき詩より

快理人久保季

あまのきりぎりすはよりきけし初雪とよふらん
うきうきとて同じくよき詩より

春まゝの實

あまのきりぎりすはよりきけし初雪とよふらん

じつは一日きりぎりすはよりきけし初雪とよふらん

藤原頭輔卿

あまのきりぎりすはよりきけし初雪とよふらん

あまのきりぎりすはよりきけし初雪とよふらん

梅花江より 漁志季

つきり有てあきらむるも梅のちるるを待たせし
子日の心城より 大中に長柳は
春日野の子日重ひてそ針さひんか
百そ歌中より

大蔵卿廷房

春霞をりかくせりも水たひしを野に
柳急風といふとよもせ行ふ

院御製

風もけ柳のこころいひくはす
まひ

百そ歌中より 柳より

春家より 實

船もに風よりひきかきしを柳の
池岸柳より 漁雅兼柳は
風もけを柳のちるるを待たせし
ふ子鳥より 前新院尾張
いふ人をもあきらむるも梅のちるるを待たせし
霞中雁より

藤原成通柳は

柳のちるるを待たせし

田原とよめ

藤原経通卿

今こそ誠誠よわう存るまふふもいふやうに

花重風こころ事とよめ

拱政右大臣

吉野宮の櫓や咲ぬらん少くも里よりよき

白河院花見御幸

新院御製

尋ねぬ我を人もも知るん今うしろにふし

太政大臣

志しつゝ下り宿をれも分るはさうり

人おかりてしるる 太宰人貳毛實

吹風も花あたりをさそふといふはさうり

侍賢院兵衛

まづ代りてしるるもあつてさうり

源雅重卿

年とに咲る宿の櫓むけ紙ゆ木まうひう

宇治前太政大臣京極の家御幸

院御製

まふすならかゝる人といふはさうり

遠山櫻といふはさうり

春言人久公實

白雲とどろくはるの母みいひ心とくははかり

松間櫻とつるるははかり

内食

まこと松のえりいづりて風まきまわはかり

左巻書實能

こまのふくははかりははかり

花の春友とつるるははかり

内食

りぬくははかりははかり春よりははかり

ははかり

新院河原ふくははかりははかり

侍賢河本能

白雲とどろくははかりははかり

藤原歌補能

万代ははかりははかりははかり

休日尋花とつるるははかり

徳貞亮能

まこと松のえりいづりて風まきまわはかり

河院河原ふくははかりははかり

ははかりははかりははかり

まつりさけり女房りやうてふもせりし

堀河院御製

いせにくはるは浪とみはるは花やこころ

徳帥俊頼

ふさるわあすもきてん花をひてあさき

山花をひてあさきこころ事成りし

太宰大貳長實

こころいふ花とてしるは新なりこころ

深山櫻

撰政大臣

あつさにかは花枝をねてあさき

人々櫻千十首もせしめり

伏見天皇

こころを咲かすもてしるは花やこころ

山花面合ひし

大中長

なつさき花とてしるは花やこころ

宇治前長家

皇太子

あつさき花とてしるは花やこころ

源俊頼

山嶺より来る一わくさしめしけりみづの源の糸
遠く山花のころもよき

大蔵卿連房

ふりよさけりもよき咲きしけりみづの源の糸

藤原忠隆

芳野ふねがみより目もとをほろりもよき

堀江院御時女のひかり殿女房よりあまきりてむ

ありきけりよきもよき前斎文院おし母

ふりよきあまきりてむもよき風はれり

ふりよきあまきりてむ僧正行尊

ふりよきあまきりてむ花が道とせしけり

後冷泉院御時女のひかり殿女房よりあまきりてむ

ふりよきあまきりてむ堀江院大長

春あまきりてむ山嶺より来る一わくさしめしけり

月前見花とふ心成りよき

大蔵卿連房

月新もみよりあまきりてむ花が道とせしけり

秋あまきりてむ堀江院大長

ふりよきあまきりてむ太宰大貳長實

ふりよきあまきりてむ山嶺より来る一わくさしめしけり

水上落花といふ事とよめり

源雅憲撰

むらびあふもや春といふらん花をこころ谷のり

落花満座といふ事とよめり

右兵衛督實社

けさいふもあふもいふもそをうむいふも

堀河御河中宮より風静花芳と

いふも花はうまうま

源後頼朝

花はうもみそ花もさう花風のさけあり

落花の心は 長實つ母

春といふもさう花もさう花風のさけあり

落花随風といふ事とよめり

右兵衛督伊通

うらふいふ吹く風を風花といふ事とよめり

水上落花といふ事とよめり

大納言信保

ふ上もあふらん川の井をいふ事とよめり

藤原成通撰

水のあふつじを花みちをいふ事とよめり

花散れにうつる河のうへ

藤原永實

あかきうきさきあはれ心にてもよ袖のゆきも
河の院御時をいふはう河のさき
さめちのうきよ山入るにすせ行く中
うきまなてゆく花のうきさき
あはれいおひせとありと

御連殿

さうけうきあはれまきつめて
たのなまあつりうきさき

郁芳門院安藤

花のうきさきあはれまきつめて
あはれ花のうきさき

隆源はゆ

あはれうきさきあはれまきつめて
あはれうきさきあはれまきつめて

高階恒成卿

櫻さき山とつるあはれまきつめて
後冷泉院御時をいふはう河のさき
うきまなてゆく花のうきさき

おしるのけりやい浪てふを知らん
ふせむとにほせとありて申す所下節
やめんそやふしうはふしうなり
い浪てふを知らんてふにほせ有れ
え折てふしうふしうにほせとあり
あつてふしうふしうふしう

下節

たふさふのけりやい浪てふを知らん
新院おとて強を童風とてふとあり
中洲之雅を

あつてふしうふしうふしう
余良とて人ふ百とてふとあり
権傳正永縁

山重ふしうふしうふしう
百とて歌中より杜若とあり

後漢より歌

あつてふしうふしうふしう

春の田とあり大仙之信

あつてふしうふしうふしう
南代をより津守國基

鳴る井の野原の山田にやけし待たれてより志ある
後冷泉院御時弘徽殿女御等合は

苗代つゝなまより藤原隆資

山重外を山田のさうろよ若く水とせぬ日也

家の山吹と人あまのまうてきてあるひ

さうけいつてりけりけりともてより

中納言雅之

けふ宿は又いふみちよりけりけり山吹をいれ

水邊歎き
攝政左大臣

さうりちてけりけりけり山吹をいれけりけりけり

太宰大貳長實

春の神をいれ川をかきみてうけりけり山吹の

後冷泉院御時新合は山吹をいれ

前太宰大貳長房

山重外を山田のさうろよ若く水とせぬ日也

晩見蹴躰こころよりさうり

攝政左大臣家三河

入日は夕なみけをいれけりけり山吹の

院山重外を山田のさうろよ若く水とせぬ日也

大久保侍

久和ねむろ金で糸路のたみ橋よりあ

藤むさしめろ 友原那浦那

ひこたのまへにたてしむるねもし

片友のねよりあけろとて

律師増賢

くふ人もあつて庭の友のたねとて

いふ藤蔵ねとろ事とて

高進の部

ね凡のときせうとて友のたねとて

二條開自家とて他退友とて

大納言經信

他ひつねのひよふしにたねとて

百そ歌中より藤むさしめろ

修理大夫歌子

すみれをいふは友のたねとて

田中藤たといふとて

神祇伯歌仲

わろくうつろくさる春あめとて

隣家友花といふ事とて

内大臣家越後

あかふかつてえみきとあはれを句いん我をほて

三月盡の心をらうる人僧都詮観

春のゆくをさじ人郭をふふあはれをわ

中納言雅定

あはれをわらわをたけしそをふふをうけ

三月盡の心をらうる人僧都詮観

内大臣

あはれをわらわをたけしそをふふをうけ

扶政左大臣家子人々三月盡の心を

ゆりうらや

源俊賴卿

あはれをわらわをたけしそをふふをうけ

全服をうける年三月つこもり人

あはれをわらわをたけしそをふふをうけ

藤原顕輔朝臣

あはれをわらわをたけしそをふふをうけ

あはれをわらわをたけしそをふふをうけ

金葉和歌集卷第二

夏部

卯月一日の日文に心はよき

源師賢卿に

我のころきこへまわ夏衣むふまをけしめ

二條岡自家とて人こそ作心なまを

けけりよきなり 藤原盛房

夏ふあけそよふとてを振ふたよりもあき

應はえき之條肉素とてな樹信葉と

そよふとてけけり

佐和製

やけそよふとてを振ふたよりもあき

人仙と信信

ふしんたもあきなりよきなり

鳥羽殿よりきけり

心

春衣人久き實

きけり

卯た連情こころよきなり

大蔵卿廷房

ふしんたもあきなり

卯花とよめ

に侍従

雪うさぎまふいもてし卯を公るは月夜に

拱政左大臣

うの卯にぬきけりまけりまよきまよきまよき

卯花誰嬌といふもよめ

中納言實行

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

うの卯にぬきけりまけりまよきまよきまよき

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

藤原公成

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

藤原公成

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

拱政左大臣

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

源雅光

卯花とよめけりまけりまよきまよきまよき

郭公と爲るにきそ二日とあるを

宣和御製

楊成允

子規をいふの禁をうけし勢とて歎きぬ

長實の家河合井郭とてり

右京太史經志

年といきとほすこと郭少卿、所為北堂

時島又小川

肉大皮

恋すふをまねてん郭公の母をねむの枝！
月夜

執心

藤原元甫

心を欠りあくる敷きあらはれふ

義曆二年内裡并食ふ孰ると人りか

そつてふやう

蘇東坡言

郭公のひるやうに
初よりと
示るゝ定とをいふ

時鳥

檀香正永緣

うゝひりやうしを郭るむとぬる心地す

人々十そふみけろふより

原後新刊

待てなみせに時鳥詠とくかふふじ

郭の好むといふ事以て

中納言實行

おころすおろせし時鳥さうきも閑を地
待郭のころゆきとよりせ行る

院御製

杜鵑もいよる里で明すお友のむさふみさん

後忠つ家待合ふより

二條河原家待前

約人の宿とてしる時鳥さうきも閑を地

中納言女

かこもはかめおとつと閑すといひし時鳥の元

郭のよより

前納院六條

宿のくまうきも閑す時鳥の宿のけりさる

中納言雅定

郭のまかりしをいふおとつと閑すといひし時鳥の元

字法前を改む家待合は郭のよより

康賢王母

ふらふ浦の舟をいふおとつと閑すといひし時鳥の元

匡房で義作おとつと閑すといひし時鳥の元

つらふ浦の舟をいふ

中原高真

さうもあ(は)ふらういれけし馬の心けろふてあな

郭とよめり 藤原成通羽

かき一都の明めすあやなく我まけり

月前郭とよめり

皇后宮式部

郭とよめり(は)ふらういれけし馬の心けろふてあな

晴岡郭とよめり

源定信

つぎ子は逢坂の馬あられなく我まけり

為郭とよめり

清人

ほき次ふらういれけし馬の心けろふてあな

西中郭とよめり

大仙之経信

郭とよめり(は)ふらういれけし馬の心けろふてあな

カ月日實能とよめり

内大臣

あやけに神とよめり(は)ふらういれけし馬の心けろふてあな

永永元年殿上恨合とよめり

大納言経信

あはれぬわりのあはれ月夜にうらやま
都芳門に杯合すあやめよめ

飯原岩吉

あはれひてふゆなふのそあはれはる

兼暦二重内裏所合すあやめよめ

春家とる實

おほやふあやめよめつんかちちつてみ
きけふけりけりすめしあはれ月夜にうらやま
つるすそ
信濃に水原母

あはれと秋月ひきとつてりそあはれはひき

百首歌中ふあやめをよめ

春家とる實

あはれとるよとるあはれあはれあはれあはれ

五月五日家よあはれあはれあはれあはれ

左近米府生泰重久

にれくはそあはれあはれあはれあはれあはれ

ひく中はすすせけりあはれあはれあはれあはれ

けりあはれを人あはれあはれのあはれあはれあはれ

けりあはれ
三宮

後よりやうやう里田の事我れにあらはれ

五月五日より 参議師頼

ことなかりし岩き水あてまゐるふかき

藤原定通

五月五日牧ふより東屋のくちをたて

信中納言俊忠の家評合は五月五日の心氏

よめる

叔父叔仲頼氏

五月五日あるまゝあらしといふはまづき楊子とあ

五月五日あるまゝあらしといふはまづき楊子とあ

いふはまづき楊子とあ

三言

五月五日あるまゝあらしといふはまづき楊子とあ

棋政はたて家にくる夏月心氏より

神祇伯頭仲

夏月心氏より

信中納言俊忠の家より評合は火鷄の

心氏より

藤原頭巡行氏

里といふく火鷄の夢といふことより有るまゝ

攝政はたて家とて心氏より

源惟光

實行の家計各々夏風心成より

夏衣する時の系と吹用よふもかけ吹麻やえん

水風晚涼思

漁後頼弼氏

風をけいけと浮葉よ玉あてすしめねいそ
の教

照射心紙より

源仲正

[illegible]

神祇伯歌仲

志うてぬい山子やいもまつていくむらさき書を原

中納之後患

五月やと花梅ありと書風につてようたふ志を
あきら

百々歌中に花梅の心をより

春之大方實

病むといふ極うにかゝりて一糸もすゑを風えたり

二條白家にて西後野茶と云ふと

よき事

源俊賴別長

これをも夕タとリ（茅生に）クイあウツミイのすくぬウツミイまウツミイれウツミイ等ウツミイなり

實行つ家新合、櫛川、心なより

中納し雅定

大井河つせう舟のさめえなふめわを火の新

夏月なより

源親房

玉うけさうふの米同しつ運あつた家新の

六月廿日以秋の節よりけり日へる

けりけり

横政右大臣

乙未月のる日氣をけりさる風のえ秋のけり

么實卿の家にて對水待月といふ事

よりけり

友原基俊

夏の風の月よりけりさる風のえ秋のけり

秋陽一夜といふ事

中納し雅定

みちきけりなぬのすき、二夜をこゝろ秋のけり

金葉和歌集卷第三

秋部

百首歌中に秋の心は紙にあら

春家と云ふ實

こよとくに吹夕暮風をきと秋の心よりすかりれ
野も草も露もこころに紙にあら

太宰大貳長實

中よりあこひの壁の白きと紙をきりて秋の心
後次品院御時を紙にあらき秋の心合ふ
七夕の心紙にあら

大佐月侍

義代はきりぎりすきりぎりす秋の心
七夕の心紙にあら

結岡法師

七夕の昔の衣といふ紙にあらき秋の心
七夕の心紙にあら

梅元仁

友長といふきりぎりすきりぎりす秋の心
七夕の心紙にあら
おひるふきりぎりす七夕の心紙にあら

こけし。終ふじぬふらふまはし舟きうらふ

中絶之國信

セムカヤル衣しあふさうあわさうにやせふ

セク坂初めは成より

内大尺

かきやとてつらむ時をさあ後しあわさうさる

皇后宮信を大時

織女あめあつ後をもつともあふさる

月食家我後

あまのついでに舟は後しあわさうさる

源俊賴初尺

かきやとてつらむ時をさあ後しあわさる

あまのついでに舟は後しあわさる

源雅兼初尺

あまのついでに舟は後しあわさる

あまのついでに舟は後しあわさる

あまのついでに舟は後しあわさる

あまのついでに舟は後しあわさる

大徳之國信

よつと秋はふさふさ雪のふりや
田舎は秋はふさふさ雪のふりや

左兵部繕寫

猶然之風とて其病はるゝなありて

山里秋とふ事とよめ

藤原行威

山ありて雲人てなき宿をけとけむの小田は秋んきり

師賢初乃梅津山とよ人ふまゝなり

同家秋凡とつてとよめり

大德之經

父も其門下の子弟と云つて、若くは金も持たず
今月には、何よりか

大江實錄

厚くふあつた
あち夕月軒の至
りきんじき

攝政名家と月費の心算を啓

得けるよしあり
藤原忠隆

風をけし校舎とて木の間をめぐり秋の夕月を

月夜宿友と之と紙上

法橋忠命

第拾二回

閑見月といふものより

歌仲の女

あまにきき金銀のしらべにけしきとわすれし月
照明月といふ事とよみ

前中納言伴房

はるのいなわぢくわへし月影をこゝろより人よか
鳥羽殿より旅宿月といふものより

春宮少輔實

秋の月明石のせきみねにけしきとわすれし月
寛治元年二月十又東鳥羽殿より旅宿上

月といふものより

院御製

はるかにわづらひ月をうつるものより

大納言信信

ては月が若き水よりさしけをみせし月を
照明月といふことより

氏親の志教

はるかに今夜の月をうつるものより
後冷泉院御時皇后宮女御より
藤原隆信

ひくちのちよりなりになくけりを安国元年の初より

駒込の紙よりなる 源仲公

東路よりふきり望月の初よりいひやめさるる

二月十八日 源仲公

源親房

ふじさきなる紙と月新ふといふいふ人より

国九月あり年二月十八日 源仲公

春宮よりなる

新紙のうにけりなる紙とて紙のけり
水上よりなる 永壽院六條

九月十八日 源仲公
九月十八日 源仲公

源後頼朝

すよひの紙なる紙とて紙のけり

源仲公

月よりなる紙とて紙のけり

人のいふ紙とて紙のけり

源仲公

ふじさきなる紙とて紙のけり

源仲公

よきふ

人納ま信信

いぬつかつて里の月紙にてつるおせむといふ事

兼暦二年内裡予令に月とよめる

春家太公實

今より新をそめてふかふふはるも月とよめる

宇治前太政大臣家持令月とよめる

皇后家供津

照月をえはくや病をい秋の水もむけにそり

後頼朝

おのころをい秋紙をききそは秋も月といふ事

水と月

扶政大臣

あはれをいづともきけとほろむりやとよめる

宇治前太政大臣家持令月とよめる

一と記

つるまきより河の月をきき守るよとよめる

秋紙のふかゆるそ月のあつてける

秋のふかゆるそ月のあつてける

参議師頼

いふふかゆるそ月のあつてける

秋月の書といふ事

藤原隆任卿

菊のよき花をうけてはふりては秋の月をよみて
照明月といふるをよめる

池行宗卿

名残なく花をみてもいそいで心のもいす
い月とみぬ人といふをよめる

平師季

いそと山をいりて山をりては秋の夜は月
空は入道も太政大臣三十二歳を今月

月をよめる

藤原忠隆

なつじき月をいりては秋の夜は月
奈良花林院を今月をよめる

信僧正永縁

いそと秋の夜をいりては秋の月をよめる
詠月を

友成歌楠卿

いそと山をいりては秋の夜は月をよめる
太皇太后の御合を今月をよめる

大納言信信

春日山よりとむる月影をこの可きわきなり

歌季の家より九月十二日人月の夕

よきけりよ 太宰大貳長實

ふりかこ寝をみゆり月影はうつぬ人あはる

後頼朝

じきや月の海をよみん晴ゆくまに思ふまゝ

友原家経

とらふ心なむうし月半はゆきかき人さうひ

月照古橋とらふる月半はゆきかき人さうひ

ふら

いふて人もかきぬ月半はゆきかき人さうひ

水上月とみゆり 藤原實光

月影の海をよみん晴ゆくまに思ふまゝ

歌季の家より九月十二日人月の夕

ふりかこ寝をみゆり月影はうつぬ人あはる

月照古橋とらふる月半はゆきかき人さうひ

友原家経

いふて人もかきぬ月半はゆきかき人さうひ

水上月とみゆり 藤原實光

歌季の家より九月十二日人月の夕

ねまゝ衣かきもすうたゝみらけ妹を

桂月をうめてよめ給

井藤原有教母

な。じまお母ねまゝなりきり月やじりみみ

行臨曉月とくろる紙よめ

信僧の永縁

あまふつとあけはまの月のごとく山崎

對山待月といふるよめ

土御石大佐

天明の月をうめてよめ給

山家曉月といふ

中納言顯隆

山里の田のなをあゝとあけはまの月を

月をあけはまにありてまをて月を

あけはまに都の人と月をいふと尋け

きてよめ

晨明の月もあゝの浦風は浪をきこふとみ

月前夜無といふ事哉

後頼朝氏

あゝけはまの月もあゝの浦風は浪をきこふとみ

中よみ

前斎院六條

あけの野へまひて巻けり花のさふき

ふしとていふもあやう

歌仲母

うゑ系にうゑまじいといふ出の勢といふ

馬よりうゑ

ふみへん

玉にけりてきれと馬のうゑいふ

春家夫人の實

いせ山をうゑやうゑんといふ

麻より

一言人達

いふ麻うゑれは花の床の山風より

花の麻といふ事減より

皇后宮在御の佐

あやと明る月夜にあやをうゑいふ

夜間麻祥といふより

田舎家越後

あやと明る月夜にあやをうゑいふ

横政は長家ゆゑ麻といふより

源雅之

あやと明る月夜にあやをうゑいふ

藤原家仲親氏

世中とあきそめやと河川に流るる人
野花常とてとてとてとてと

皇太后肥後

太皇太后之崩令よ人なりて其の
太皇太后之崩令よ人なりて其の

女より

僧正行尊

小萩原に於てなり其の白も色く
萩より心太宰武長實

女より

とて此の心けり野に花をうめり
其の心けり野に花をうめり

中絶後志

夕暮の心けりてとて此の心けり
女より心けりてとて此の心けり

根政氏

女より心けりてとて此の心けり
根政氏心けりてとて此の心けり

源忠季

さか河のけよはけらなえふ浪のふそやあふん

蘭波より

左兵衛清信

るにゆへもさくこやあふん秋のけとま麻

神祇伯成仲

うにふいふらあふれんかこらひやあふ

鳥羽殿前裁合りきりむらひとより

春宮より

あうけのふみあふ秋風さひきまあふあふ

平忠盛

いふふふふふふふふふふふふふふふふふ

備前院湯村にあふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふ

後頼朝

うふふふふふふふふふふふふふふふ

河原より

うけの川せもふふふふふふふふふ

都吉の院根合は菊とより

中納言

こふふふふふふふふふふふふふふふ

鳥羽殿前裁合々菊哉とあり

修理人久歌季

子と母とをよつじとて事ふ人愛もあふん

棋政左大臣家少々紅葉陽恒とあり

よめり

藤原仲實卿

鵲の卵をうばらぬすね成るまで宿のねと

義暦二年由良行合々紅葉とあり

源師賢卿

ふきの穂の川にぬる子をぬるぬるふに

とあり

とあり

大内と信信

大井河とれみさうとあり

大皇太后宮合々紅葉の心

後頼朝

とあり

藤原伊家

谷川よきみけとあり

大井河とれみさうとあり

修理人久歌季

にみ井河いせにありて紅葉と書けり
深山紅葉といふ事とより

大納言経信

山あふみのきくひくもみおふがき
紅葉といふ

神祇伯頭仲

も我いふ事お葉やあくると藤里の風
大井河の道遠より小とお葉といふ

とていふ事

藤原伊家

折らぬ花よりみかく鴨よりいふ事
大井河の道遠より小とお葉といふ

修膳長官顯孝

そく山あふみのきくひくもみおふがき
紅葉といふ

大井河の道遠より小とお葉といふ

大井河の道遠より小とお葉といふ

大井河の道遠より小とお葉といふ

紅葉といふ

太宰大貳長實守

色あふみのきくひくもみおふがき
九月書けり

九月書けり

中原従則

あすもいづる山の秋も新のこころとぞん

源俊頼別記

平の春よりなしくきつる秋も新のこころとぞん

九月盡の日は井にゆりてよめり

春まゝるる實

行めも四のひみちをぬるこころ秋も

とゆりけり

金葉和歌集卷第百

冬部

兼暦二年は前より殿上人のこころ

とゆりて平にゆりけり

とゆりて平にゆりけり

神宮の春よりなしくきつる秋も新のこころとぞん

後二位藤原親子家造は合ふ所を

ゆりて

とゆりて平にゆりけり

奈良に人よりそふりけり

いづれより

持僧正永保

山川の水を海までつたふまゝお茶の葉をうけとり

棋政家三河

神月忘るれのみあはれこころよりうけとり

後朱雀院御時出たあゝ務蔵お茶と

いづれより 前中納言資仲

りりいづれより秋をいそげぬ龍田の川の水を

大升何よりお茶とより

平致親

大升何よりお茶とより

いづれより

大納言経信

いづれよりいづれよりいづれよりいづれより

いづれよりいづれより

前中納言基良

いづれよりいづれよりいづれよりいづれより

十月十日より麻の葉とて

いづれより

いづれよりいづれよりいづれよりいづれより

いづれよりいづれより

後頼朝氏

都田^くみ^はて神^みひ^しじ^うふ^み葉^はう

細代^をよ^り 名^な后^ご家^け肥^へ後^ご

い^のの^いせ^りみ^ゆり^の細^は代^をよ^りみ^えん

月^づ照^し細^は代^をよ^りみ^えん

大^お細^はを^を信^{しん}

月^づ清^きみ^やあ^ろに^にあ^みと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

旅^り宿^{しゆく}を^を敷^{しき}と^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

旅^り宿^{しゆく}を^を敷^{しき}と^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

開^{ひら}路^ろ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

源^{げん}通^と高^{こう}

あ^の氏^{うぢ}と^とふ^ふ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

水^{みづ}江^えと^とふ^ふ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

水^{みづ}江^えと^とふ^ふ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

谷^や水^{みづ}結^{むす}水^{みづ}と^とふ^ふ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

内^{うち}大^{だい}氏^し

谷^や水^{みづ}結^{むす}水^{みづ}と^とふ^ふ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

百^{ひゃく}六^{りく}歌^か中^{ちゆう}と^とふ^ふ千^ち鳥^とと^とふ^ふさ^さゆ^ゆり

藤^{ふじ}原^{はら}仲^{なかつ}實^{じつ}羽^う羽^う

藤^{ふじ}原^{はら}仲^{なかつ}實^{じつ}羽^う羽^う

神^{かみ}祇^ぎ伯^{はく}氏^し仲^{なかつ}

そぞろにぞりこねる月影の宿よりあそびて
ありて

氷満池上といふとよきとあり

大徳と伝信

水鳥のほら花いよほいそくそくふりて

深山数段より大蔵郷逢房

そくそくふりてふりてふりてふりてふりて

水邊寒きとあり

大徳に長引に

そくそくふりてふりてふりてふりてふりて

源頼朝に

そくそくふりてふりてふりてふりてふりて

橋上初雪といふとあり

前斎院尾法

そくそくふりてふりてふりてふりてふりて

初雪といふとあり
人徳と伝信

そくそくふりてふりてふりてふりてふりて

雪中鷹狩といふとあり

徳通に

そくそくふりてふりてふりてふりてふりて

鷹狩の心成りあり

源俊賴朝臣

けいふとやうふけりわすれぬ秋のたより

内侍家越後

おとろやわやふとやう雉子こころのあはれ

百とすすはるる心とあり

大蔵卿匡房

ふせえ末の松山浪こころをのろふ海よりすこ

うけ前を改め家持合はるる心とあり

右大臣藤原

あけ雪よりけのめはあてうけしそをけりしは

中納言女王

二條の女

うけのすけのねみふあをさるる心とあり

大嘗會主基方備中國跡高とあり

藤原行威

雪の道はなると山のけりあすもをけりしは

雪の道はなると山のけりあすもをけりしは

雪の道はなると山のけりあすもをけりしは

雪の道はなると山のけりあすもをけりしは

雪の道はなると山のけりあすもをけりしは

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

すみゆは 皇后文徳天皇御時

と見えにふたはるあつたてあつたてあつたてあつたて

百六歌中よりあつたてあつたて

隆源江神

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

皇后文徳天皇御時

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

選子内親王よりあつたてあつたてあつたてあつたて

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

藤原道房朝臣

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

家経朝臣よりあつたてあつたてあつたてあつたて

康資王母

柳重孝公よりあつたてあつたてあつたてあつたて

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

皇后文徳天皇御時

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

ねとつ流のあはれはあつたてあつたてあつたてあつたて

つるふにちり秋も風吹くせ舟じまふけね

水島城より 前新院と係

ちりりおるえにやなれ電衣うきう

池水より 前新院と係

浪もくふいもおとさきえにけりまふたの海

修羅より 前新院と係

こひろりうきうき藤の家はゆりおる

依花侍春より 前新院と係

内食

かふれく年ふれくきにけりもしゆりおる

歳暮より 前新院と係

藤原成道卿に

今更次より年よりけりおる

横政人にかへりおる

けり歳暮より 前新院と係

藤原永實

おるふにけりすきあきより 前新院と係

けりより年よりけりおる

来書より 前新院と係

三

近年とて海軍とよめ

大御子後實

水の中ふ松の志のくひりね息子を世にひかり

北禁中親王といふるをよめ

中御子實行

みよみひさくには八重子のけとふ風とて

花笑近年といふと紙をよめ

源師俊朝臣

万代にうてもいふ松をさすきかきりなるは

梅後親王の御所をよめ

藤原國行

あつた力えういふるし隆を代とあふ

百々歌中よ祝の心をよめ

俊頼朝臣

君の世松のうきとて海のとて

祝の心紙をよめ 大御子後實

きつた世をよめては名に松紙ひさしとて

後一條院御時弘徽殿女所を合り祝の

心紙をよめ 永成法師

君の代を末に松のうきとてすめ

嘉永二年三月鳥羽殿行幸池上

いふも紙よりせ行ふ

堀河院御親

池上の庭より極楽の寺ありし處の山を

大嘗会主基方辰日衆音聲并鼓山

ふめり

藤原行盛

とにちて見ふ山をたてふなり
そふれ

悠仁方朝日卿より

友原敦光卿

白鳥の寺よりありしにありしなり

已同樂殿より雄谷卿より

松尾の寺より里にありし代より

後六条院御時大嘗会主基御中四二

万卿より

藤原家経卿

いふものより紙よりありしにありしなり

いふものより紙よりありしにありしなり

高階明頼

いふものより紙よりありしにありしなり

祝の心紙よりありしにありしなり

いふものより紙よりありしにありしなり

御書

花契逃去といふふとよりあり

大宰大貳長實

おもみれまゝとせし給ふはつたれはとせもかん

横政たれに中將とくゆるは去りて

とてそりゆるに為陸つ行事并て

ゆるはつりて 同防内侍

うけと神もいふとこいふと山と家のあま

きしし次 友原道經

忠世とて万代にあらへといふ貫川の鶴の毛衣

とて忠世とてあらへといふ貫川の鶴の毛衣

中細云通像

こみ世とあゆむとていふととていふととて

大蔵卿通房

世とてあらへといふととていふととていふと

新院とて藤花久句といふととていふと

大久曲侍

友原とてあらへといふととていふととていふと

祝の心はより 源忠孝

忠世とていふととていふととていふととていふと

實行で家計合し祝の心はより

藤原為忠

いふふくわうへき君の世をひもとてふ神も元よき
前中えけりて内へて白法なるは雪野で
ゆるしそ六條右大臣のふつりけり

宇治前右大臣

雪川よりふき雪野よりけりて白法なるは雪野

なり

六條右大臣

つるく雪のふき雪野よりけりて白法なるは雪野

天嘉元年正月辰巳日今より祝ふは雪野

けり

後白河院御製

なりけりて白法なるは雪野よりけりて白法なるは雪野

松上雪野よりけりて白法なるは雪野

御製

美代乃雪野よりけりて白法なるは雪野

前斎文信公よりけりて白法なるは雪野

川ありて白法なるは雪野よりけりて白法なるは雪野

祝ふは雪野

源後頼朝氏

よりけりて白法なるは雪野よりけりて白法なるは雪野

雪野よりけり

金葉和歌集卷第六

別部

魚房別片丹後守よりてきりけり日

つりきり

大船主任長

君うやをのねれにきこてきりきりいふ

きり

藤原魚房別片

よききりきりきり水よあをねりきりきりきり

重す師よりてきりけりいふ餓しゆきり

きりきり

江河老太

白くきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきり

頼人

よききりきりきりきりきりきりきりきり

師補つてきりけりきりきりきりきり

よききりきりきりきりきりきりきりきり

前々事大貳長房

きりきりきりきりきりきりきりきりきり

おしきりきりきりきりきりきりきりきり

上東つ

けきりきりきりきりきりきりきりきり

源公定大隅守よりてきりけり時月

藤原有定

歩みふりふふにありけり
経年ゆきへゆきふりけり
る實つるふりけり

中絶を廻後

うけり初日より元成つてふりけり

也

春文をふりけり

初日より月よりふりけり
君らふりけりけりけり

ふりけり

梅則を初に

しほひふりけり
ふりけり

金葉新集卷第七

恋上

九月廿日見けりあまのこにけり

小一條院

あまのこに神のこねまてあまのこにけりあまのこにけり

女ひとりつりうら大江の宿にけり

あまのこにけりあまのこにけりあまのこにけり

懐恋のこにけり神祇伯の仲

うらまのこにけりあまのこにけりあまのこにけり

春宮のこにけり

あまのこにけりあまのこにけりあまのこにけり

那古の家にて人恋のこにけり

藤原頼朝の仲

あまのこにけりあまのこにけりあまのこにけり

女ひとりつりうら源雅光

あまのこにけりあまのこにけりあまのこにけり

後二位藤原親子家の子にけり

宣徳の仲

あまのこにけりあまのこにけりあまのこにけり

太宰大貳長實

おひねりすまのうみそを福のうみそと申す
地中ける人のかたけおきしうみそと申す

243

津守國基

羽子にたゞ多かりなづけをけさかふよありて
て者

歌次

今

[illegible]

中絨玄雅定

くさるゝのてをえとん
くさるゝのてをえとん

あはれきうにいづけうんが恵ひて宮城いあや
くふく物中て又の目にけり

春字之公實

心をやめてくぬの思ふをばしからず
 別家と寄徴女恋とふんせよめる

少將公教女

七ツ又え秋もあじな東也ねかといふん

寧水鳥憲といふ中紙より

源師俊朝臣

之為所_レ由_ニさくはるゝ_ハあやしき事なり
神代

寄夢窓といふ東城より

左馬侍所實徳

夏よりあふとあふとよきもよういふはつと心なり

歌より次 中納言殿

白きつら山張成るてういふ心とてなり

中納言後志家にてのめとあふぬ心

心成より次 源氏四羽に

あひんたのきとまへうとれなりあふいふ心

忠意し心なり 中納言實行

中納言の心なり

對川徳人といふおとけなり

藤原基光

なるじとあふに人なりあふ心なり

歌より次 源氏四羽に

いふとあふなりあふ心なり

中納言の心なり

とあふ心なり

藤原基光

いふ心なり

いふ心なり

よりいさうゆるる 讀人おん

後よりいさうゆるるやまこととあはれさし
えりてさくいひさけり人のいさうけり

内大臣家大進

あさうそくおしけりそのすまひとそそん

實行は家評合り意の心より

長實卿母

きくめいの継橋よりいさういさういさう

友原通経

忠臣よりいさういさういさういさういさう

中將公教母

なりていさういさういさういさういさう

いさう

日石玄右衛門

後川袖のいさういさういさういさういさう

源政國初長

わいさういさういさういさういさういさう

いさういさういさう

藤原政輔初長

いさういさういさういさういさういさう

左大臣實能

あふりえのしすきまもあひえん事ことなり

後羽意の心成なり

源行宗羽氏

つるし心こころいふあひてもいふも地ちううけ

河内流計時とき書本ほんより

春衣をる實

うあふりえのしすきまもあひえん事ことなり

遠の心成なり 若原歌羽氏

あふりえのしすきまもあひえん事ことなり

春衣をる實

あふりえのしすきまもあひえん事ことなり

後羽意の心成なり

源行宗羽氏

つるし心こころいふあひてもいふも地ちううけ

河内流計時とき書本ほんより

春衣をる實

春衣をる實

あふりえのしすきまもあひえん事ことなり

因信て家許合に夜憲以より

源俊頼卿に

ふらふら床乃す枕をさるや人の世を
九月五日の如くてもあるおもしろき
いさふらもつとほふふいふら

桐横

あやもと阿ねまふ河川をみよ
同九月の多年人城さるひさし
とてきしやふれえさる梅季通

なれどもいふはふらてあやもとあやもと

人の世はふら河川をみよ

あつとふら床乃す枕をさるや人の世を
人をさるひさし

藤原惟親

あつとふら床乃す枕をさるや人の世を
あつとふら床乃す枕をさるや人の世を

桐横

あつとふら床乃す枕をさるや人の世を
あつとふら床乃す枕をさるや人の世を
あつとふら床乃す枕をさるや人の世を

いづつうふ

藤原正家朝臣

秋風吹くをねてふる葉のふらふや地を

わづいゆふ人のあはれうきじふるをね

えいづつうふ ねる有教母

きこく身とねん心りもあはれうきじふるをね

長實の家并合ふ悪のやけふ

友原忠隆

つらき涙のあはれをねてふる葉のふらふや地を

人成ねてふる 藤原惟親

あはれをねてふる葉のふらふや地を

いづつうふ

前新文月

浅きうきねてふる葉のふらふや地を

遇不逢恋の心をよう

左京大夫経世

一葉といふ葉のふらふや地を

後忠の家とてあはれ十そふみけりや誓不

遇不逢恋の心をよう

右后文成部

あはれをねてふる葉のふらふや地を

實行御家平食りおのれ様より

源俊賴朝臣

つとむく悲しむれ我より憂は海の家なる

意心紙より
藤原成通 別

世を笑し人をも
 笑はれし人なり

楊政左

いふは、
其の補を
みひるを
あかぬ人
とて

かゝひけぬ人のまゝふりてうぬなり

白河女御家

傳
一
欠
心
十
し
成
才
少
歟
多
言
絶
子
也
けろめと

惠乃賢人

律師實德

のちかき契し中道ふゆり共志あり
心也すこ

皇太后聖壽

つゞいてやもめは、
あはれと心からすも

旅宿憲乃心
攝政左長

見せしや、え思ひぬの節、花玉め、あかろふに
 へるゑ

堀河院御時艷書合たりよろろ

皇后字肥後

高麗道こそてりと少少立月夜は独宿りし神の志で

皇座まゝ人々意のまはらうまづけるは被
也業志といふ事誠より

美濃

ふよふ人の心はなほいそぎにまはれぬと
人よりふのういそぎにまはれぬと

横政な食

いふは第の末はとて人の玉さふふ人をなほ
三日月よふとていふは

藤原為忠

いふは第の末はとて人の玉さふふ人をなほ

心志

讀人

あつたかひとていふはとて人の玉さふふ人をなほ
をいふは第の末はとて人の玉さふふ人をなほ
より

三宮大進

なるもわくもいふはとて人の玉さふふ人をなほ
事いふは第の末はとて人の玉さふふ人をなほ

横政な食

あつたかひとていふはとて人の玉さふふ人をなほ
百とていふは第の末はとて人の玉さふふ人をなほ
修理太夫殿

我意をやすみかくとてふにわがとふ多き事
横政な食家とて意の成りあり

徳雅堂

あにふりあはれじよとあはれはてをね枝
岸山恋とてふとよあり

大中に長別氏

恋儀でむひ入あふんふわ月日つりあ
つらうとてふ人ふあふしあはれみそつら
くろ

藤原教

うし移りあふとつらうとつらうとてふ

後志は家とて意あふ十人ふとてふ
隆本不苗恋とてふとよあり

原俊頼初氏

あふいふあふとてふとあふとてふ
あはれとてふとてふ

春日まふとてふ

あはれとてふとてふとてふとてふ
重張なりけふのきとてふとてふ
あはれとてふとてふ
あはれとてふとてふ
あはれとてふとてふ
あはれとてふとてふ

惠心院人
まゐるゝ

前中玄上經

石を其隈の水とくらしむに因つて此の

鄂次

皇太后聖訓

をいふと、
なまはるゝ
要家地

雲如家地

余景和歌集卷第八

卷下

初戀乃心成也

良暹法師

聖心成るるを
 免れしむる

公任之家にて紅葉あふりて意と三

命題人、此中、何處、に、
命題、を、おこす、か、

人々ふくむべきものなり

子之

藤原範永羽后

恋はくちくみせとやねのあやふさみ
の橋立

後朝憲の心は 源師俊朝氏

ありけりゆゑもあらはに後よりたれども有
年川増憲といふととよあり

内大臣

いふやうに斗いふを教はれりとも契り
憲の心はよき 藤原成實朝氏

忠信と称せられたるお方の心はよきとあり
道

鳥羽殿の行合は憲の心をよき

友原仲實朝氏

いふやうに神の心はよきとあり
憲の心はよきとあり

中納言雅之

あまの心はよきとありとあり入山ありとあり

憲の心はよき 右兵衛督守通

いふやうに水より新道は浅しけりあり

皇后より人々憲の心はよきとあり

太宰大貳長實

いふやうに心はよきとありありあり

奈良より人々自らよりけりあり

信濃正永保

よき

はるきと名のきく人のむしりてあはれなるあ

悪の心はよき 隆源法師

くちもはるき世り建つとてあはれなるあ
原家時あはれなりけりとうそなりけり

前中家戦後

金ろ浅海水の神なりとてあはれなりけり
後忠二家とて悪のあはれなりけり
寺に因てあはれなりとてあはれなり

快理金歌季

あはれなりけり
あはれなりけり
あはれなりけり

あはれなりけり

あはれなりけり
都もつねに合はれ悪の心は

月内侍

あはれなりけり
あはれなりけり

あはれなりけり

あはれなりけり
あはれなりけり

悉くいふやうなる 太宰大貳長實

はるきとくもわが所とてあつていふこと
うらん

いふやうに 前所の上迄

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

源後頼朝

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

源後頼朝

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

中仙玄圃

いふやうにきつとていふことも人伝つていふ
けり

水宿りあるはしき跡もなほ雪のまじり
多門とよきこととふしうけうみなり
るる月つめうけりあやめ

檀僧正水縁

得んがねはえつてあつちうへわきまに
寄水鳥窓をよめり

横政左大臣

あるもなとにいあふき鴨もきねをうと
人をうらなてけうしめ

藤原國俊女

さうなれはききしうとて人のつとを
横政左大臣家にて恋のまはしめり

源雅之

あまたあるその浦あゆみとみちかた
うねりふきあふしうとじと
あまてめめ 前斎左甲斐

海人の心とふしにうすなりとふる
物やう人あまてめなりてはなれ
つとてうらなをいひけり

板後宗女

少志

中原章經

前師資仲

伴賀方朔

柏後家女

歌次

上德竹從

物へ寄とけらるゝとけさのあひ
けらるゝと

とんせゆゑい上東門院より仰るすまむと
るそやとひけちと國てよめ

源隆節

名さくしりもつり心だふりかあへん

慈乃心より
民衆に慈教

忍僊々々ぬれぬるじけり元々雪とけり
らん

女
子
之
名
曰
細
之
恒
儀

あまふもてあふれ我をぬるやとぞ

人のもとより女房へかゝるを以て打てしめ
藤原の御初に

藤原公經羽衣

河内時艷集合より

中納言俊忠

人々をさるる油風り浪のふくまふなり

一玄紀序

とくもなれどもあまのむすぶに神のまゝ
とくもなれどもあまのむすぶに神のまゝ

くちをひきすとなめうりき人のまの月の
うらみとみえりえよめち

攝政家語

癸卯年八月二十日

ひさしうけり人のいふこと

江侍従

多き人なり心河海にまててやも勢ひなり

國信卿家評合は憲の政なり

源道忠

ふとまをせし杜の下紅葉をよもはあし

雪の初出羽井のしらをとりゆきなり

もとしりてゆけり

出羽井

とくくをわかしむるしむるの山をよもはあし

ゆ

大納言恒廣

その朝の雪けつやよとけりなりとていふ

と見えぬきつやうなとていふなり

前新院六條

ゆきけりおのころは我門眉のふにけり

きりあえりおのころは我門眉のふにけり

ふとまをせし杜の下紅葉をよもはあし

よみ人

人あつたあつたあつたあつたあつたあつた

年におもひなりぬていふことなり

客

部次

りしとふやう若川の煙ありて名をぬき
つせし

男はけふも又よゆるといふ所は

つゝ

表
う
ち
一
般
め
ぐ
れ
神
と
き
け
な
よ
違
ふ
み
え
ん

後羽憲
藤原氏

あつとゆゑにあらはぬまゝにうへへ事なり

人の心をせうきし袖のわきふと

しやう

皇后文家將

旅宿恋と心事とをめめ

快醒石久臥亭

意一紙中夢々如猿猱て安きくは袖也

4

んかたつていふとやなりきまは

よちち

一室紀序

うしろよ新みくわに夕月東おほきるゝ

蔵人
ふゆふはらとけりきく
女紅糸子

をうけりてよろ

荻原永實

この月におぼろさゆめあつとてうづきとてうづき
因縁内納とてうづきとてなまると
こころもすまじやれはよめ

源信宗紙片

あそぬ敷いもろやとてあふとてあふとてみきとて

きし次

左京大夫信忠

人志すゆめとていふとていふとてあかき神をいふとてあけき

人を招てよめ

大中長補正

あらさうとていふとていふとてあきあひうとてあきとて
いふとていふとていふとていふとていふとていふとて

信宗紙片

ほうしと思ふ人あはれあふ我をいふとてあきとて

かきひけら女あふとていふとていふとていふとて

いふとていふとていふとていふとて五月あふ

とていふとて

よめ人し次

いふとていふとていふとていふとていふとていふとて

き

左京大夫信忠

ほうしと思ふ人あはれあふ我をいふとてあきとて

きし次

讀人し次

ほうしと思ふ人あはれあふ我をいふとてあきとて

源雅定

叔父の如きと云はれしものしるしをいふもあはれなる
志平十有人よりけりいふもあはれなる
その事と云ふ

玉津島さういふにうらうらとあそぶもあはれなる

志平と云ふ 春宮と云ふ實

あふ事小舟よりいふ舟のみなさういふ事なり

源仲女

いふ事あるに志平と云ふもあそびいふもあはれなる
いふ事あるに志平と云ふもあそびいふもあはれなる

源氏物語

あそびと云ふ事いふもあはれと云ふ事いふもあはれ
攝政大臣家あそびの事いふもあはれ

よめ

源氏物語

只志平の事いふと云ふ事いふもあはれなる
志平と云ふ事いふもあはれなる

源氏物語

浅き心いふ事いふもあはれなる
志平と云ふ事いふもあはれなる

源氏物語

うらうら心なひり逢みれは愛うたれ
後忠二家とて五年十そ人ともさうり
おろそあるすといふ事とよち

源後頼朝片

あなちう程しうりるをけりやうりおとれ
かゝるこころ

金葉和歌集巻第九

雜上

じう道方とてけりみゆりて安樂
うらまゐて見ゆる梅のけり任まふて
まはするおれはゆくとち元本
おろそあるすといふ事とよち

大徳之経儀

神塙よじつ梅記ふ元本と女よる
山家萬といふと

摘政左大臣

山室もうき世中としかしねる所と云ふなり
因宗寺の花と云ふ後之條院の事
事なりと云ふなり

之宮

うを記しえとせり年ふろ記を我身ゆかりそ
た見の御筆とていふる内約のりそ

つるし

檀僧正永德

ゆきふりそめとふとふもてとせうん

五

肉倚

僧正行尊

くろきと世
山極花よりふきふき

佐河院御時殿上人あまたふて花見小

はりありきけろに仁聖寺子行宗別氏あり

とすてえいやありと尋ねる事についで

うきつぎ

源行宗弼

く世に我をぬえり人の花をよきと我を
山里の人とまるとたあらふけりにより

陳宜禧

見ゆ人々古野の山の隈をやりぬるや若くは
後之條院かく述にたりてその年々盛
けろむとてふる左近府生紫面方
去り見しにむとて嘆きなりたうぬふ
いそむるにむとて嘆きなりたうぬふ
よめり

藤原氏仲別氏

手ふとてむにけぬ理本は花の部みとてふ
蔵人なりて味時の信経のむとてふ
いそむるにむとて嘆きなりたうぬふ
よめり

信経のむとて嘆きなりたうぬふ
香椎社よりむとて嘆きなりたうぬふ
移の葉とてふとて嘆きなりたうぬふ

神主入膳大氏志

りむとてふ香椎のむとて嘆きなりたうぬふ
源心在るにむとて嘆きなりたうぬふ
むすむけふとて嘆きなりたうぬふ

良羅法師

むとてふ山路のむとて嘆きなりたうぬふ
藤原基清蔵人なりとて嘆きなりたうぬふ

又のりうら

藤原家経

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

一ふちふちふちふちふちふちふちふちふちふち

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

源俊賴朝臣

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

田家元朝とくさくさくさくさくさくさくさく

中絶之基良

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

仁義のすけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

中絶之基良

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

大寺の住持岩屋少くさくさくさくさくさく

僧正行尊

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

良進の住持さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

僧正行尊

さむけいさだをさむけいさだをさむけいさだを

閑山は約月とくさくさくさくさくさくさくさく

こせり心るや月よのゆるきとて思ふ
山家とて在明の月とみるやあか

僧正行尊

本間よりかきつけられたる紙を我々とて
に治前を改めたに對しあよこゝろ紙を
あもせられたるより更にいへん公實の
とつたりなり

源卿光

去日山ふつと照月影ふきわむる有り
僧都頼基之明山ふつと照月影ふきわむる有り

梅能光

うすし 浮世 何ぞいふとく下をえ 景月と

返

僧部賴基

りたりあやゆと月氣くまのこきとあて
 都あつた佐藤おけりけりあうふ
 くらけりあすけりけりけりけり

六條石大長小方

へくともなうしす
 源仲正の女官所
 聖子ときを約ひて

隔

義讀

田子家藏後

浮世國々之海々々々々

大甲辰補子

けりきりきりきり

大綱之徑徑

めふき

ふみこ

卷之七

藤原惟規

六條右大臣

又うねいとの井も、さういふおそろそわとて
 おもひとていふておへうとてさうなうけり
 よとていふけり
 前所文内付

前序

如ういふがきで志あるさうなふりかへて我々
 和歌部保馬よりて丹波^{の玉}は保馬に都は
 言合ふふふ或勢同いふふふふふふふふふ
 中御之定頼つるふふふふふふふふふふふ
 とふせ行ぬ丹波へ人をつりえやつふふふ
 してこそなふふふふふふふふふふふふふ
 中記けることとてふふふふふふふふふ

小式部内侍

おけふはくわんをさきまへにわきもみとて
あふあふにぬるぬるのうまうまけり
ふゆとあつとさうと都子あはれし
つすそよめね 平康貞女

成かにそ入はる浪のさうさうきみまゝに

七

娘

なり、計す毎に、思ふとみる、ふ、袖の海も、心は、
百々、歌中より、愛の心とより、

修仁堂藥房

うゝ祢乃良なりせん別じりか型みえま

猿肩の心持より
衆議師頼

此中より一みりくのあさうにほみね
 い集撰し得る時予こゝれとくそ

二五

藤原朝臣

家乃凡ありねおゆえうー杜のよふ系に記すなり

和泉或親在山ふりけうに大集よとまりて
東海くやれん人の言ふにあまうりておきり
けうと島をたふす人のよれきけり中とれハ

ふやろ

和泉武部

僧正行尊

くさくさうさぬがう水車細くほせふらうと
まがしめ事ありていつひゆる上東
つはよ棋子とあるそ人よとてくすうけ

佐川右大臣

つうけうにめのはとさうまゐるにすまふま
いさ

こまけう月日程もきこほにふみみくも教ち
僧正行尊まうてきてうらさうとていふ
かきいといふはうけうとぬいづうは

ふゆき宗道

弟はこそいれとこさうけうもおきてゆへ
いとこいりうまうてこいぬてぬきたけ
あまうばうみとせきりうけうとて

櫻井氏

ちんうすうのさうらふいぬて
後冷泉院御時あつて國のさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさ
女房うらゆかり中けうはあつて
まじはてうさうさんといふは

はるかなつらけり 又將田侍

きくひかく世ふおりのき鳥を道いひうさす

ひの國ふつとわたりとくはる人のしよ

えんきききふきつてをわたりたきとくはる

いふめれ 後人きく次

もく子ふすこひなつあもせんとふ物いひは

百首歌中よ山家とよめれ

後理人きく次

ひそくおえりはる家へ入るふふふふふ

藤原仲實卿

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

殿上やうてはるふふふふふふふふ

ふふふ 源行宗朝氏

うむむむむむむむむむむむむむむむ

殿上やうてはるふふふふふふふふ

平志威朝氏

うむむむむむむむむむむむむむむむ

かふふふふふふふふふふふふふふふ

はるのふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

行状をうらあてまうり心むうき
よあら

僧正行状

身一人独つる方なりやまきまわぬ海あり
きこぬ人のておろて有るにやうで
けらるるとういたる梅をこせうりぬ
よあら

上人不知

系なりつらとみかきかくこらと梅ふぬ
けら
北河院河村中実の女方うりと高砂伴実
に侍守てゆき時和方浦にまんとてささひ
きこぬまもぬりきりきりきりきり

前中実甲斐

人あふいりききうひてききぬ和方うりと
保實てふうりきりきりきりきりきり
ゆきうゆきとてゆきうききりきりきり

侍多とあふり 藤原實信母

おとよりやききりきりきりきりきり
月入てあふり 源師賢別氏

西心祖とあふりきりきりきりきり
梅の伴別氏陰奥ちよきりきりきり
てあふりきり
藤原隆資別氏

我々を氣遣はせりぬれどあつは河のきさなり
さうに人のき日すつて麻有のちをけり
よみてよめり 萩原 實光 別名

之を山神の志那のちをくちありなりとさう
屏風の法よきすつてつるゆへ今うらふ
さけり玉とよめり 藤原 家經 別名

ゆへもきさうつてふきすつてとるを松のきさなり
ゆへに次 みるへし 次
あつは河のきさなりとさうぬれぬあり

後 実光 別名

上陽人若寂多々亦若尤亦とさうと
よめり 源 雅光

じつとあつとさうにゆへもきさなりとさうと
青蓮 畫眉 細長とさうとさうと
源 俊賴 別名

さうとさうとさうとさうとさうとさうと
年々とさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと

きりきりいふてさうなるけり僧にいふ
人うふふ外は志願しありきなりか
るをみてよめり 僧奉行尊

いふ世に後し。まかりし世にもふふなり
大中に捕弘法主あきけりいふなり
をせしむと太神きふして福はさるなり
りむみふとぬ人のふりてよむなり

弟の家のなにもなと病気のよきなり
六條右左大臣の家つりていふなり
いふなりとふなりとふなりとふなり

いふなり

十年まですまふなり
いふなり
いふなり
いふなり

忠快法師

いふなり
いふなり
いふなり
いふなり

いふなり

周防内侍

いふなり
いふなり
いふなり
いふなり

かろけりてよめ

津守國基

同くさきし川み流に座のなふりみ

也

賀茂成助

すみしめありてふりふ事もあは

目店家取徹ありけり

後頼みせり細めよき

中々多に頼みあはれ

ふれしけりけり

しめせり

ふりけり

室宿家大貳

石よりありけり

大原の行運

よめ

天台座主仁寛

あはれきり

百々歌中

源俊頼朝臣

世中うらふ

おこふ

おとこいふそとておなまへになめさ思ひに
なりたやふとにつけし家

讀人ふえ

うはふや人の心あふふふにふふに像あふふ

あ

あ

あふふ心ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

氣議師新

うふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

源頭國羽片

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

源頭國羽片

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふ

藤原云放

もしふりな流し物紙ありて逢るやうに
河原河原後重と我部並に中
よりうて中納言重資卿の政弁を
信ずる所なりけり

源俊賴別記

日く是れあまのついでに我れいふはをかれ
おまゝと奏し給へ国防内侍と知ておまゝ
なりとよとせむせる有るにせうとつけり

国防内侍

かゝるふとあはれしとて我れいふはをかれ
おまゝと奏し給へ国防内侍と知ておまゝ
なりとよとせむせる有るにせうとつけり

かゝるふとあはれしとて我れいふはをかれ
おまゝと奏し給へ国防内侍と知ておまゝ
なりとよとせむせる有るにせうとつけり

金葉和歌集卷第十

雑下

云實御からし侍とて家の家よきと云

小梅花にさうさけらとみく梅むしと

つけら

藤原基俊

じーりあはさうさ梅の毛ふ我も物さう

也

中納言實行

根りたる花の毛さ密くふて木ぬとさかき

人あきさうて花見ありきてあう事

ほ風の毛さうさ梅さうさけらとみく梅むしと

人あきさうて花見ありきてあう事

つりさう

平基經

梅ゆいさう風の毛さ密くふて木ぬとさかき

後之條にさけらとみく梅むしと

玄の帳よあはさうさ梅さうさけらとみく梅むしと

花の毛さうさ梅さうさけらとみく梅むしと

藤原有佐親

あはさうさ梅の毛さ密くふて木ぬとさかき

小方さうさ梅天守の毛さ密くふて木ぬとさかき

より

六條右大臣

難波はるき
 の？ 福入志を
 其心もいれ
 舟船とて
 都芳の院
 2 思振る
 して みる
 子あそ
 知信り
 くらふ
 康政王母

知信り

康熙壬午

うりけり秋つとあそびとてあうき心出のけしき
下福子あそびをそとてあうき心出のけしき

下
膈
子
山
ノ
座
是
ノ
軟
弱
多
ク
以
テ
有
リ

源後賴朝

せまもあはれの河をさす道とあはれをさすはうた
 律師實源よりとふ女房の佛供養せんと
 よる色めくはれはうてみさ道ふ事もおかす
 けり
 けり
 けり

[illegible]

讀人讀

玉うけの重なり客も止まりてさあけりかたもと
 にわぬふこと捨てゆるうとくさふ事つけり
 別はまゝ物あると別々なり子産んがさく出さる
 安唐守基經よとく侍るはなう決り
 名人のゆゑさまでうりより名とあてよめり

藤原信母

なりけりやあせありき後にはりあえと何はた
心はみずなぬあふ人かもしりてなや
うりええよめり あふ人
兵弁のつとめを病みふとの病よりたき
範水初長出家しきりあき能く
て何はた國よりひつりけり

藤原通宗別伝

よめなり世にうけぬと國ふ越えりえも打た
律師長清方よりなほ母ふあつひ
してありきりあき能く

あふ人かもしりてなや
うりええよめり あふ人
大蔵卿匡房

あふ人かもしりてなや
うりええよめり あふ人
藤原賢子

あふ人かもしりてなや
うりええよめり あふ人
信僧正永保

夏よのじつをわひまじしう種とて
人いじすめ母の遠きよ（まかり）りき種は
よきと病とてくまあんとしけり時を
てみたりきり 讀人ふえ
わがもつゝもてき夏をわづかてわん
小書内侍とては上東院より
きねはなれ跡まつりききねはなれ
内侍とてきねはなれきねはなれ

お泉成親

いかにきねはなれきねはなれきねはなれ

きねはなれきねはなれきねはなれ
きねはなれきねはなれきねはなれ

平忠盛卿

いかにきねはなれきねはなれきねはなれ
陽明院くまねはなれきねはなれ
きねはなれきねはなれきねはなれ

藤原資信

いかにきねはなれきねはなれきねはなれ
白河院の女卿くまねはなれきねはなれ
友のきねはなれきねはなれきねはなれ

僧正行尊

まふまでさうりもみゆるかたの友の衣きて
道房羽衣に重帳よりさうりしてのち
お羽井のりともさうひさけりやせよ
P. 318 y. 4

柳え任

これさうの夕暮ぬくありて人おこす
まけなぬるありけぬなとさうけて心か
そさふよめか

源行家羽衣

ふせん後世中ふすみよそへはねとぬれきりし
乾西羽衣ふくそへ伊豆國よまありけり
ふくしよと二日月まていふももぬれきりきり

かきうもせしとんいふさうりけり
さかきそきとさうけぬとぬれきり
さうりまていふももぬれきり

龍岡は神

天にかり水りやれとせぬさうり神
神感ありてたぬりてさうとぬれきり
けりり家集みきり
心経供書とさうり心経人によりさうり
つてり

備政はた

ともきもじりさけりけり
ともきもじりさけり

多うと花をふ僧のきぬくもくわくろき
わづらふ花をふ僧のきぬくもくわくろき
善賢の十花文は願我條欲命決時と
いふは花より

花樹に師

花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき

花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき
花をふ僧のきぬくもくわくろき

不転品のあらは

檀傳正永保

あひだに法をひろめいへりうらやせむ

涌出品のあらは

きく地祇のあらはりていへりうらやせむ

薬王品のあらは

檀傳正永保

うきものあらはりていへりうらやせむ

人のあらはりていへりうらやせむ

にあらはりていへりうらやせむ

うきものあらはりていへりうらやせむ

うきものあらはりていへりうらやせむ

檀傳正永保

うきものあらはりていへりうらやせむ

檀傳正永保

うきものあらはりていへりうらやせむ

檀傳正永保

うきものあらはりていへりうらやせむ

檀傳正永保

檀傳正永保

きふいづりにしそ月とありとありとあり
醍醐の糧か余り柳をのりとてよめ

弥海法師

多に中とて海はのふめはすもそとて
恒永成字とてよめ

原俊頼卿

てあり海の原とてよめはすもそとて

地獄の法とてよめはすもそとて

とてよめ
和泉式部

浅きとて海はのふめはすもそとて

ふありとて海はのふめはすもそとて
一とてはすもそとて
うけとて海はのふめはすもそとて
郭のふめはすもそとて

田口里

きふいづりにしそ月とありとありとあり
とてはすもそとて

きふいづりにしそ月とありとありとあり
屏風のふめはすもそとて
とてはすもそとて

不残

源俊賴羽片

あき佛とかなふちあき城よりいそぐはき海と
こゝろあきかん

連所

升るる木の水のうきはあきなりき
人のあきとあき城よりいそぐ

永成法師

あき人いそぐあき水よりいそぐ

信律師慶範

みりあきとあき水よりいそぐ

あきのあきとあき

頼慶法師

あきあきとあき水よりいそぐ

あきあきとあき

梅津のあきとあき水よりいそぐ

あきあきとあき水よりいそぐ

神主成助

あきあきとあき水よりいそぐ

行重

あきあきとあき水よりいそぐ

宇治とて田の中は老るおこし命とて
とるく

まの田よりすまぬ貴たをけりか

宇治入道前太政大臣

み水よりいふといふとて

日つはよとて

観羅法師

日のよとてまをけりといふとて

平る盛

あつとていふといふといふとて

田の中は鳥のそとをみく

永源法師

そとをみくといふといふといふとて

永成法師

さうとていふといふといふとて

あつとていふといふといふとて

あつとていふといふといふとて

あつとていふといふといふとて

あつとていふといふといふとて

あつとていふといふといふとて

はるかなる海をみく

為助

つゞくことなきこと

國忠

いそぐことなきこと

ふりまて目に見えり道に實成河

あそりふれおとこふ河をみく

ふりまて目に見えり

頼經朝臣

賀茂川とほろことほくもつる那

信經

かりふゆえにことほく

あふ河をみく

ふりまて

なふあふとゆとみん

匠房卿妹

鴨舟をきこふこと

和歌式部賀茂ふりまてけりといふ

あそりふれおとこふ河をみく

神主忠頼

ちるやあはつとていあふまふまふ

和泉武部

いまだたきつる御ちとあふぬ

源頼光別名但馬守にゆるぎ時節の

まふけいさつとていふのちあふかえり舟

のちりけつとていふあふさふひよこと路

のちえさつとていふあふさふさふさふ

ふを国てくぬすさふさふさふ

源頼光別名

まふさふ舟のちとあふさふさふ

いまだたきつる御ちとあふぬ

桐模母

いまだたきつる御ちとあふぬ

ふを国てくぬす

いまだたきつる御ちとあふぬ

ふを国てくぬす

いまだたきつる御ちとあふぬ

いまだたきつる御ちとあふぬ

いまだたきつる御ちとあふぬ

いまだたきつる御ちとあふぬ

かゝる多ふえれくういづ花をよと

鳥とわはういふもさうあはれとみ

あちききうきふきういふもさう

うきふきういふもさう

こひいづ梅花のほろ枝よつとさう

律師慶羅

いぢもかきういふもさう

まればうきふきういふもさう

あちききういふもさう

龍のよのういふもさう

讀人きし

ふきふきういふもさう

うきふきういふもさう

鶴の水きういふもさう

頼筆師

あちききういふもさう

ふきふきう

さもいふきういふもさう

うきふきう

やうきふきういふもさう

観蓮法師

見てもうらやまに紙をきくを利

七十よりうまてけられてあいのり

いふ事やうまてけられてあいのり

源俊頼卿

なみえのうらやまに紙をきくを利

くくせうまてけられてあいのり



